

2026年度 同志社女子大学大学院 文学研究科
情報文化専攻 修士課程 入学試験問題
(第1次 2025年9月11日実施)

受験番号
参 考

英 語

解答は別紙の解答用紙1枚に記入すること。

以下の英文を和訳しなさい。特に太字にしたキーワードについては、その意味の説明を含め、丁寧に訳出すること。

著作権の都合上、問題文の掲載をしております。

受験番号

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There is no text or other markings on the paper.

2026年度 同志社女子大学大学院 文学研究科
情報文化専攻 修士課程 入学試験問題
(第1次 2025年9月11日実施)

受験番号

小論文（選択課題）

問題用紙は2枚あります。解答は別紙の解答用紙1枚に記入すること。

下記4テーマの出題から、1テーマを選択し、論述しなさい。

【メディア文化】

1. 2025年に大阪市此花区夢洲で開催されている「日本国際博覧会（大阪・関西万博）」は、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとして、国内外からの注目を集めている大規模なメディアイベントです。この万博を「メディア論」の立場から考察する際の視点として、下掲の1)～5)を挙げることができるでしょう。いずれか（複数選択可）の観点から、具体的な事例などを交えながら、現在開催中の大阪・関西万博についてメディア論の立場から論じなさい。

その際には、万博の歴史的・社会的背景にも留意し、必要に応じて、ここに挙げた視点以外の観点からの考察を補っても構いません。そのうえで独自の見解を加えて述べてください。

- 1) 国威発揚のメディア
- 2) 情報流通・広報・宣伝のメディア
- 3) 建築・パビリオン・展示などが有する「視覚文化・記号」的メディア
- 4) デジタル技術・VR/AR・メタバースなどの展示によるメディア
- 5) 過去の万博（1970年大阪万博など）との比較からみるメディア文化史・文化論

2. 下に例示したような歴史上の「メディア革命」は、新しいメディア技術の誕生によって、人びとの知識伝達のあり方や社会の構造を大きく変革するものであった。

- ・エジプト象形文字やメソポタミアの楔形文字など「文字の発明」（前4千年紀頃）
- ・グーテンベルクの活版印刷を嚆矢とする「印刷革命」（15世紀）
- ・ラジオやテレビの普及による「放送革命」（20世紀）
- ・情報のデジタル化、インターネットなどによる「デジタル革命」（現代）

これらの「メディア革命」のいずれか（複数選択可）、あるいは「メディア革命」にふさわしい別の事象をとりあげて、以下の観点から考察しなさい。

- ① その「メディア革命」によって誕生した新しいメディア技術の特徴
- ② その技術が普及したことで、人びとの知・知識のあり方やコミュニティの形態、また、社会の仕組みに生じた変化
- ③ その「メディア革命」と、現代のメディア環境または社会との接続
- ④ 上記①～③から総合的に考察されるメディアと社会との関係

【表現文化】



3. 短編映画の構想

これまでの自分の人生において、特に強く記憶に残る経験、あるいは大きく自分に影響を与えた出来事の一つを選び、その経験または出来事をふまえたフィクションの短編映画を構想しなさい。構想にあたっては、映画のジャンル、ログライン、設定（主要登場人物、時代、場所など）を記載するとともに、作品全体のプロット構成を詳述しなさい。なおプロット構成については脚本家シド・フィールドが推奨する三幕構成の脚本術に基づき、以下のフレームに沿って記載すること。

第一幕「設定」：インサイティング・インシデント、ファーストプロットポイント

第二幕「葛藤」：ミッドポイント、セカンドプロットポイント

第三幕「結果」：クライマックス

4. アート・プロジェクトの構想

アメリカ人アーティスト、スザンヌ・レイシー（1945-）によるアート・プロジェクトの事例を参考に、自身が解決すべきだと思う社会的課題をひとつ選び、その課題の解決に向けて社会改革を促すためのアート・プロジェクトを構想し、その内容（テーマ、コンセプト、具体的な方法、使用するメディアなど）について記載しなさい。また必要に応じてイメージ・スケッチなどを描いてもよい。

プロジェクトの構想にあたっては、ソーシャリー・エンゲイジド・アート（SEA）であること、すなわち、アーティストが対話や討論、コミュニティへの参加や協同といった実践を行なうことで社会的価値観の変革を促す活動であること、美術館やギャラリーといったアート領域の外に広がる社会に直接関与するなかで、作者および作品という概念を脱して、参加や対話そのものに美的価値を見出すことを条件とする。

スザンヌ・レイシーのアート・プロジェクト事例

ソーシャリー・エンゲイジド・アートの先駆者スザンヌ・レイシーは、これまでレイプやDVの問題に関わる女性被害者に焦点を当てたアート・プロジェクトを実践してきた。例えば、女性10人中6人が暴力の被害者で、暴力的なパートナーから逃れる女性は1割しかいないとされるエクアドルにおいて、DVをテーマとするアート・プロジェクト《De tu Puño y Letra (By Your Own Hand)》（2014-15）が実施された。本プロジェクトにおいてレイシーは、行政、NPO、学校、アート組織などとともにプランを立案し、さまざまな年代・職業の男性に、見知らぬ女性からの暴力被害体験を綴った手紙を受け入れさせ、DVへの理解の再考を促そうと試みた。

レイシーは、プロジェクトの準備段階において、男性を対象とした「男らしさと暴力」についてのワークショップを開催するとともに、現地の大学において家庭内暴力に関するカリキュラムの開発を行った。またプロジェクトの最終段階では、「女性に対する暴力撤廃国際デー（2015年11月25日）」に、闘牛場のリングにおいて、300人の男性が女性たちの手紙を読むというパフォーマンスを行なった。DVというエクアドルが抱える重大な社会的課題に焦点を当て、一般男性に積極的な参加を求めながら、彼らの意識変革を促そうとした社会変革のためのアート・プロジェクトである。